

いちじょうだにあさくらし いせき  
9. 一乗谷朝倉氏遺跡(第151次)

所在地：福井市城戸ノ内町

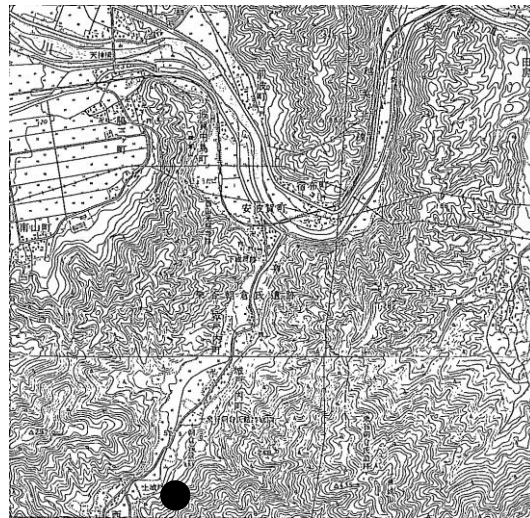
調査原因：史跡整備

調査期間：平成30年7月17日～11月2日

調査主体：一乗谷朝倉氏遺跡資料館

調査面積：180㎡

時代：室町時代



位置図 (S=1/50,000)

**調査の概要** 近年は上城戸跡の内側すぐの地区で幹線道路を確認する目的の発掘調査を行っています。すでに第138次調査(平成24年度)で山際を走る砂利敷きの道路を確認しており、これが遺跡の中心部へ向かってどのように伸びるのが当面の課題となっていました。その解明をめざして行った第149次調査(平成28年度)では、山際から一乗谷川の方へ向かう石組溝を検出しましたが、道路に伴うものかどうかの確証は得られませんでした。そのため、今回の調査では、第138次調査で検出した道路と側溝を追いかけ、第149次調査で検出した川へ向かう石組溝との直接的な関係を調べる目的で調査区を設定しました。調査の結果、溝がつながっていく様子は確認できましたが、道路が溝とともに川の方へ向かうかどうかは依然課題として残りました。一方、道路も含む複数の砂利敷面や溝などの遺構が時期差をもって構築されていたことがわかりました。

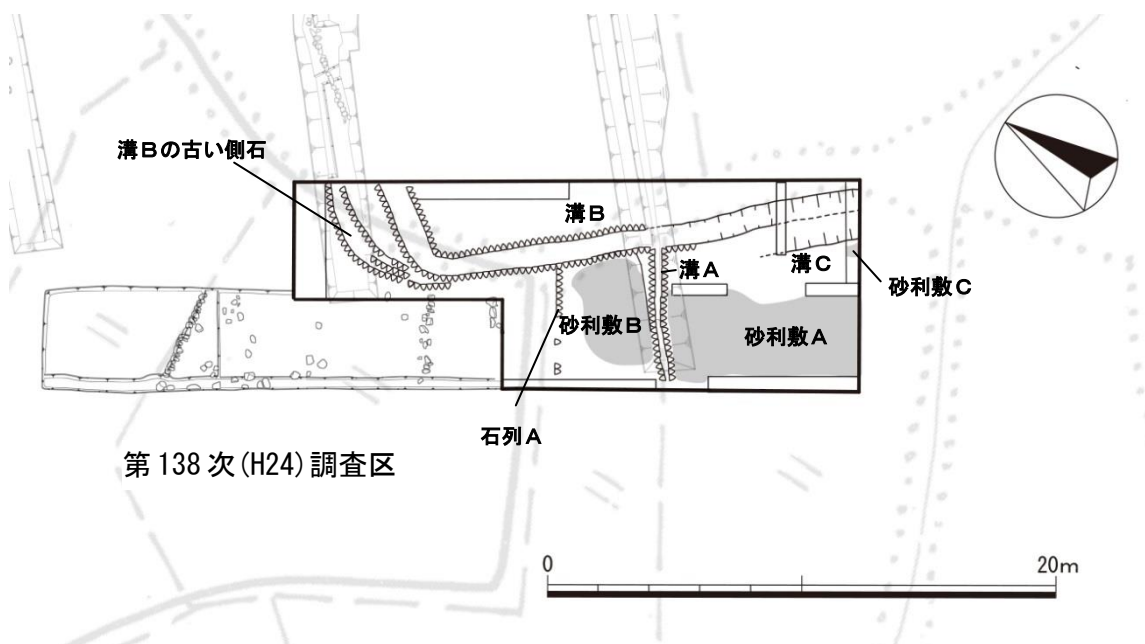
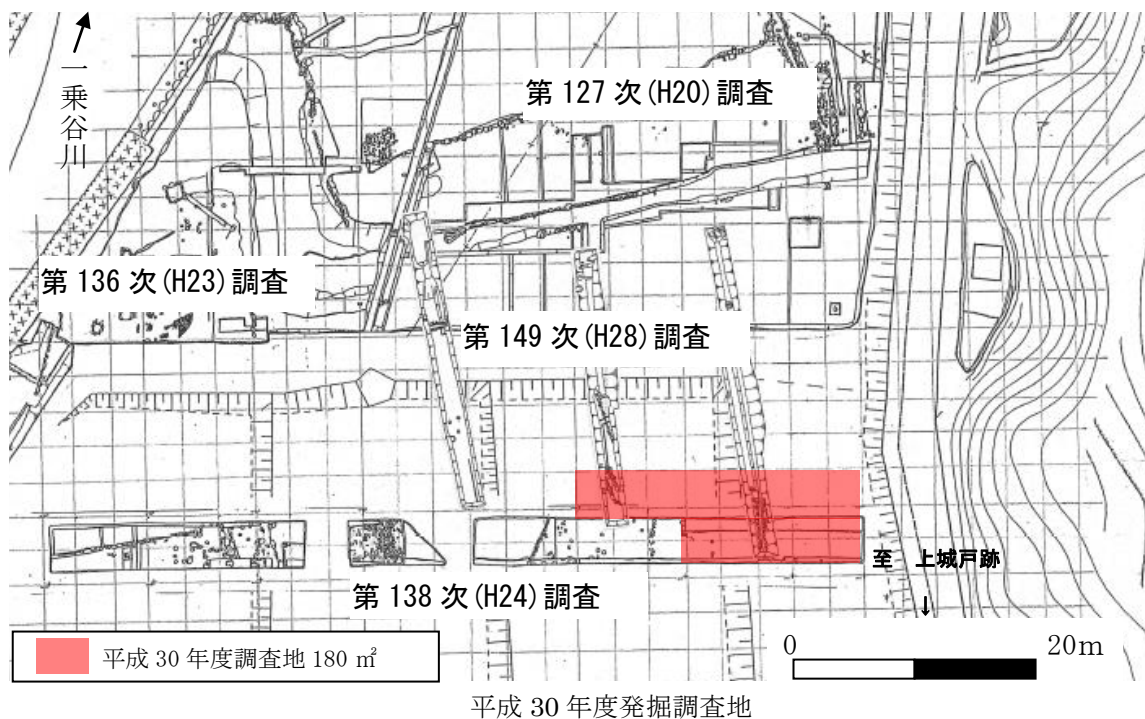
**遺構** 砂利敷Aは、溝Aを側溝にもつ道路と推定した遺構で、第138次調査ですでに確認していたものです。現在のところ山際を走る幹線道路と想定していますが、北方へは今回の調査区内で途切れていました。一方、溝Aをはさんだ西側では砂利敷Bを検出しました。その範囲の西端は溝Aとほぼ並行する石列Aによって画されているようでした。

溝Aは溝BにT字に接続しています。溝Bは川側でL字に屈曲しており、その部分に古い段階の側石が3条残っていました。理由はわかりませんが、山側へ寄せるように順次作り替えたものと判断できます。一方、溝Aとの合流点より山側の側石は後世の削平により一部しか残っていませんでしたが、下層で幅の広い素掘りの溝Cを確認しました。一部しか発掘していませんが、溝Bと同じ方向に伸びているようです。溝Cの脇には砂利敷Cがあり、砂利敷Aの下層にあるものとみられます。

**遺物** 室町時代の土器・陶磁器が主な遺物です。ほとんどは遺構検出面を覆う遺物包含層から破片の状態で出土しました。遺構の中からは砧(繊維を叩いて柔らかくする道具)や漆器などの木製品も出土しています。

**まとめ** 砂利敷A・B、溝A・B(最終段階)は同じ時期の遺構と考えられ、さらにそれらより古い時期の遺構の存在が明らかとなりました。いずれも一乗谷が朝倉氏によって都市

として整備された時代の所産と考えています。砂利敷Aは依然として道路跡の可能性は高いものの、遺跡の中心部へ向かってどう延びるのかは明らかにできませんでした。砂利敷Bや石列Aは町屋に関連する遺構の可能性もあり、今後は幹線道路の確認を進めつつ、本調査区で検出した遺構の性格を明らかにする必要があります。(松本泰典)



平成30年度 第151次発掘調査平面略図



全体近景 (東より)



溝A・Bと砂利敷A・B (南より)



砂利敷Aと溝B・C (北より)



溝B (東より)



木製砦出土状況 (西より)